

## 思いやりの心

中一

私が人権について考えた時、一番先に思い浮かぶのは、祖父母のことです。

私の祖父母は、耳が聞こえず、しゃべることができない聾啞者ろうあです。

だから、手話を使って会話をします。声を出しながら手話をするのですが、聞き取りにくい言葉が多く、手話がわからないと会話がほとんどできません。

音が聞こえない分、不自由な生活をしています。それ以外は障害のない人と同じ生活をしていきます。それは、私にとっては幼いころから当たり前前のことで、手話で会話するということは、特別なことではありませんでした。しかし、他の人にはそうではなかったのです。

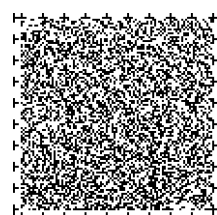
私は小学校低学年の頃、両親の仕事の都合で、放課後は祖父母に預けられていました。宿題が終

わると、近くの公園で遊ぶことが多かったのですが、祖父母は遊んでいる私を見ながら、手話で会話をして待っていてくれませんでした。そんなある時、私と同じくらいの年の子たちが、祖父母の様子をもの珍しそうに見ていたかと思ったら、笑いながら祖父母の真似をしてみました。その様子からは、手話が珍しくて真似しているというよりも、少しばかにしているような様子が感じられ、私は大きなショックを受けました。

祖父母は少し離れたところにいたので、その子たちのしていることには全然気づいている様子はありませんでしたが、私はその態度に、思いやりのなさだけでなく、悪意さえ感じたのです。

私はすぐに、祖父母とその場を離れました。けれども、気持ちは重く沈み、悪口を言われたり、暴力をふるわれたりしたわけでもないのに、とても嫌な気持ちになりました。そして、祖父母の生活が、他の人には当たり前でないことを、改めて突きつけられた気がしました。

その後、祖父母と一緒に出掛ける時に気をつけ



てみると、珍しいものを見るような視線や態度が、何気ないしぐさの中にたびたびあることに気づきました。聞こえていない祖父母が気づくことは少ないのですが、周りにいる私にはよくわかり、そんな場面を見るたびに悲しくて、祖父母と出掛けるのがだんだんつらくなりました。でも、何も悪くないのに、そんなふうに逃げてしまうのは祖父母に悪い気がして、ある時、父に話しました。子どもの時から、父は私と同じ思いをしているのではないかと思っただけです。父は、私の話を聞いても驚かず、

「お父さんの子どもの頃も、そういうことはたくさんあったし、何かあれば、聾啞者ろうあの子だからと言われて、とても嫌だった。たくさん差別を受けたいと思う。でも、差別している人の中には、そのことに気づかないで差別している人もいます。そういう時はどうしていいかわからなくて、結局自分の中で我慢してしまうことが多かった。」  
と話してくれました。その時の父の顔は、現実を受け止めながらも、昔のことなのに今も怒り、ま

た傷ついているようにも見えました。しかし、最後に、「そんななかでも、親切にしてくれた人もたくさんいて、うれしかった。でも、聾啞者ろうあだとか関係なく、普通にしてくれているのが一番ありがたかった。」と話してくれたことが、私の心に響きました。「普通が一番ありがたい……」とても重い言葉だと思えます。私は、悪気がなくても何気ない態度や言葉が、人を傷つけることを知りました。

そんな私自身も人を傷つけるような言動をとったことがあるかもしれせん。思いやりは見えるとよく言われますが、思いやりのなさも目に見えるのではないかと思います。そう考えると、思いやりをもつということが、みんなが平等で幸せに生きる上で、どんなに大切なことがわかります。自分のことを大切に思うのと同じように、相手も大切に思うことができれば、差別やいじめはなくなっていくのではないのでしょうか。

